るが、いときよらなるをみ給て、○略下

〔源氏物語十二須磨〕御髪かきたまふとて、鏡臺によりたまへるに、おもやせたまへる影の、われながらいとあてにきよらなれば、こよなうこそおとろへにけれ、此影のやうにややせて侍る、哀なるわざかなとのたまへば、女君涙をひとめうけてみをこせたまへる、いと忍がたし、○略下

〔榮花物語三十七煙後〕春宮のはがねの水瓶、たらゐ、やがて、すけなかの辨、女御殿のはきやうだいの鏡、あついへの少將もたり、

〔江家次第十七〕御元服

東面厨子中有三層、上層置紫檀地御脇息、○略註鏡臺、螺鈿又臥入之

〔雅亮裝束抄一〕もやのひさしてうどたつる事

そのみなみに鏡臺をはりてたつ、そのていとうだいのつちゐなくて、からかさのかみのやうなり、かみにかゞみかくるところあり、玄もはりてくさびをさすなり、たてゝのち、まづひれをかく、そのていあをき物にぬひものしたり、かふりのゑんびのやうなるが、ふたつあるを、なかをつがひたる、ほそき所のにしきなる所を、かくよこさまなる、木よりまへにひきこすべし、そのうへにあせたなごひをかく、そのていから、からあやの三尺ばかりにてあるなるが、なかにぬひめあり、そのぬひめを、ながさまになかおりにして、なからのほどをとりほそめて、ひれのうへに、まへさまに又ひきかくべし、そのうへにまもりをかく、そのていつねの人のまもりのひとつあるが、にしきをたゝみて、ををつけたり、それをうへにうちかけて、そのうへにかゞみをかく、このまもりのこゝろは、かゞみをのけはらせんれうなり、かゞみもとひらくみの緒をつけたり、このひれたなごひをかけて、まへにさがりたる所を、ひだりをみぎにちがへて、そのうへにまもりをかくることあるべし、このきやうだいのかゞみを、この定にかけて、からくしげ、かゞみのはこを、みなみへ